

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-11C	13-047	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Incorporating non-genetic risk factors and behavioural modifications into risk prediction models for colorectal cancer. 遺伝的大腸がん発症リスク予測に非遺伝的な要因と行動変容を取り入れる		
執筆者		
Yarnall JM, Crouch DJ, Lewis CM.		
掲載誌		
Cancer Epidemiol. 2013 Jun;37(3):324-9. doi: 10.1016/j.canep.2012.12.008. Epub 2013 Jan 30.		
キーワード		PMID
大腸がん、遺伝、リスク予見		23375517
要 旨		
<p>背景： 疫学的研究により、アルコール摂取量、食事、座位中心の生活は大腸がんのリスクである事がわかっており、またこれらは改善可能である。このような環境要因をモデル化し、遺伝的リスクと一緒に疾患リスクに対してどれくらい影響があるか推定できると行動変容が行われやすくなる。</p> <p>方法： COGENTによるGWAS研究で同定された14塩基配列のバリエーションは遺伝的疾患リスクの軽減に利用されている。このような遺伝的危険因子とは別に、大腸がんの危険因子として報告されている喫煙、アルコール摂取量、運動量、BMI、食物繊維の摂取、赤身の肉と加工肉の摂取の6つを環境要因として選んだ。リスクモデリングソフトウェアを使ったシミュレーションを行い、疾病リスクに対する行動変容の潜在的な影響力を評価した。</p> <p>結果： 遺伝子だけを考慮したモデルでは、大腸がん発症のリスクは、低い群24%、平均的な群60%、上昇した群10%、高い群6%に分類された。これらのモデルにアルコール消費を加味すると、リスクが上昇した群とリスクが高い群でそれぞれ9%と5%に低下した。このシミュレーション研究により、大腸がんのリスクとされている行動の変容によってそのリスクを軽減できることが示唆された(62%の多量飲酒者のリスクが軽減できる)。</p> <p>結論： 遺伝的要因に、生活習慣の環境要因を加えることは、大腸がんスクリーニング対象の個人を選択するための有用な方法を提供することに役立つ。特に飲酒や肥満の程度などについて、ほどほどである事の効果を定量化することは、健康運動の広報や疾病予防戦略立案に良い影響を持つ。</p>		